ART in BOX

マルセル・デュシャンの《トランクの箱》とその後

Selections from the Ishibashi Foundation Collection
Art in Box: The *Box in a Valise* by Marcel Duchamp and Its Aftermath

ARTIZON
MUSEUM

マルセル・デュシャン（1887-1968）の《マルセル・デュシャンあるいはローズ・セラヴィの、または、による》、通称《トランクの箱》（1952年）は、デュシャン自身の作品69点の複製を含む携帯することが出来るミニチュアの美術館です。デュシャンの代表作《大ガラス》（フィラデルフィア美術館蔵）をはじめ、作家のさまざまな作品のミニチュア・レプリカ、写真、複製が革製のトランクに収められています。デュシャンは新しい作品を制作するかわりに、自分の好きな絵やオブジェを複製して、それらを集めてできるかぎり小さなひとつのスペースに凝縮させる表現を考えつきました。最初は、持ち運び可能な芸術の作成に際し、本の形状にすることを考えていたと言います。しかしそれが思い通りに行かなかったために、箱の形状として仕上げられました。この作品以前にデュシャンが制作した《グリーン・ボックス》（1934年）や、後年に制作した《ホワイト・ボックス》（1966年）といった箱型の作品が、デュシャンの芸術制作の思考を留めた紙片が収められているのに対して、《トランクの箱》は、デュシャンが実際に制作した作品の数々がミニチュアで、あるいは写真やカラー複製の形で詰め込まれています。結果として、それはデュシャン作品のエッセンスが網羅されているとともに、その作品のアイデアは、絶大な影響を同時代のみならず、以後の芸術に与えたのです。

この展示は、デュシャンの代表的な箱型の形状の作品を近年石橋財団が収集したことを契機に、「箱の中の芸術」に焦点を当て、デュシャンとそれ以後の展開を示そうとするものです。すなわちデュシャンの《トランクの箱》、《グリーン・ボックス》、《ホワイト・ボックス》を起点に、自ら箱の作品を制作し、デュシャンの制作にも携わったジョゼフ・コーネル（1903-1972）、デュシャンと親交を持った瀧口修造（1903-1979）、瀧口とともにデュシャンの日本における紹介にかかわった岡崎和郎（1930-2022）、瀧口を精神的リーダーに1950年代に活動したグループ、実験工房のメンバーであった山口勝弘（1928-2018）、さらには1960年代に美術家ジョージ・マチューナス（1931-1978）が主導したグループ、フルクサス、その活動に加わった塩見允枝子（1938年生まれ）、そして日本を代表するコンセプチュアル・アーティストの松澤 宥（1922-2006）らの作品で構成され、20世紀に展開した箱の芸術の多様な様式とアイデアの豊かさを展観しようとするものです。

本展の開催にあたり、貴重なご所蔵作品をご出品いただきましたご所蔵者の皆様に心よりの謝意を表します。

ART in BOX

De ou par Marcel Duchamp ou Rrose Sélavy (Of or by Marcel Duchamp or Rrose Sélavy), commonly known as *Boîte-en-valise (*The *Box in a Valise)*, was created by Marcel Duchamp (1887-1968) in 1952. A portable miniature art museum, it holds sixty-nine replicas of Duchamp's works. The collection includes miniature versions of *Large Glass*, one of his masterpieces, and a variety of his other works, plus photographs and duplicates, all fitting into a leather trunk. Duchamp came up with the idea of, instead of creating new works, duplicating his favorite paintings and objects and condensing them into a single space, the smallest that was possible to hold them. He initially conceived of a book format for his portable art. Since that did not work out as he had imagined, he switched to a box format instead. An earlier work, *Green Box* (1934), and *White Box* (1966), created well after The *Box in a Valise*, were both in that format. In contrast to those containers holding pieces of paper on which Duchamp had written his thoughts about creating art, The *Box in a Valise* is filled with miniatures of many works Duchamp had actually created, plus photographs and replicas in color. It encompasses the essence of Duchamp's work. The idea for this work had a vast impact not only on Duchamps' contemporaries but also on the arts in the years to come.

This exhibition, inspired by the Ishibashi Foundation's acquisition in recent years of Duchamp's iconic "box" works, focuses on "Art in Box" in presenting the development of this theme through the work of Duchamp and artists who came after him. With Duchamp's *Box in a Valise*, *Green Box*, and *White Box* as the starting points, it includes work by Joseph Cornell, Takiguchi Shuzo, Okazaki Kazuo, Yamaguchi Katsuhiro, Shiomi Mieko, and Matsuzawa Yutaka. Joseph Cornell (1903-1972) was involved in Duchamp's production and also created his own box works. Takiguchi Shuzo (1903-1979) was a close friend with Duchamp, and he and Okazaki Kazuo (1930-2022) were involved in introducing Duchamp in Japan. Yamaguchi Katsuhiro (1928-2018) was a member of the Experimental Workshop, a group active in the 1950s of which Takiguchi was the philosophical leader. Shiomi Mieko (b. 1938) took part in the activities of Fluxus, an interdisciplinary group led by George Maciunas (1931-1978) in the 1960s. Matsuzawa Yutaka (1922-2006) was Japan's leading conceptual artist. Through their work, this exhibition displays the variety of styles and the rich ideas that the "art of the box" developed in the twentieth century.

We wish to express our heartfelt thanks to the owners of these valuable works who allowed them to be included in this exhibition.

Marcel DUCHAMP

マルセル・デュシャン

1915年に着手されながら1923年に未完のまま制作が放棄された《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも》、（通称《大ガラス》、（フィラデルフィア美術館蔵）に関する、およそ1912年から1915年の間の手書きのメモ、素描、写真の複製など、計94点のノート類をボール紙の箱に収めた作品で、《大ガラス》に呼応するタイトルが付されている。ノート類はデュシャンの《大ガラス》制作にまつわる思考を断片的に記したもので、その集積を読み解くための明確な順序などは示されてはいない。造形作品としての《大ガラス》と、これらのノート類は、相補的な関係にして、同等に力のあるものとしてデュシャンは位置づけていた。デュシャンは本作品を、自身の異名である「ローズ・セラヴィ」の名を冠した版元名で、通常版を300部、豪華版を20部制作した。

マルセル・デュシャン（1887–1968）
《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも（グリーン・ボックス）》、1934年、ミクスト・メディア、33.2×28.1×2.5cm

＊所蔵表記のないものは、全て石橋財団アーティゾン美術館蔵である。

Marcel DUCHAMP (1887-1968)
The Bride Stripped Bare by her Bachelors Even (The Green Box), 1934, Mixed media, 33.2×28.1×2.5cm

＊ All works are from the Ishibashi Foundation Collection, except for the works with the owner's name.

Marcel DUCHAMP

マルセル・デュシャン（1887–1968）は、伝統的な西洋美術の価値観を揺るがす作品を生み出し、20世紀の美術に多大な影響を与えたフランスの芸術家。1930年代半ば、デュシャンは自分自身の作品を複製して自らの作品を再考することを思い立ち、「トランクの箱」として知られる作品のミニチュアからなる、「携帯できる美術館」の制作に着手した。小さな箱の中は、美術界に衝撃を与えた様々な作品で溢れている。1941年に最初の箱が制作されて以来、長い時間をかけて多くのエディションがつくられたが、オリジナルの素描が含まれているのはごく限られた箱である。このトランクにはデュシャンの愛人マリア・マルティンスの足が描かれた素描が箱の裏蓋に収められている。このトランクは、シュルレアリスムの画家エンリコ・ドナティとその夫人に捧げられた。

マルセル・デュシャン（1887–1968）
《マルセル・デュシャンあるいはローズ・セラヴィの、または、による（トランクの箱）シリーズ B》1952 年、1946 年（鉛筆素描）、68 点のミニチュア版レプリカ、鉛筆による素描、革製トランク、箱：39×35×8cm、素描：17.1×18.4cm

Marcel DUCHAMP（1887–1968）
From or by Marcel Duchamp or Rrose Sélavy (Box in a Valise), Series B, 1952, 1946 (pencil drawing)
Miniture replicas and reproductions of 68 artworks and one original pencil drawing by Marcel Duchamp housed in a cardboard box with a wooden armature, all enclosed within a leather valise with lock and key, Box: 39×35×8cm, Original drawing: 17.1×18.4cm

Marcel DUCHAMP

1950年代の末には、様々なマルセル・デュシャンにかかわる書籍が出版された。本書もそのひとつ。詩人にして美術評論家・収集家でもあったロベール・ルベルが、『マルセル・デュシャンについて』と題してデュシャンの経歴を記し、予備的な総作品目録を付して出版したもの。デュシャンは、この本の函（外箱）のデザインを請け負った。麻布張りの厚紙を使い、表紙に飾り板を取り付けた装丁をほどこしている。この飾り板については、豪華版にはコロタイプ印刷にステンシルでの着色がなされているが、特別豪華版には、エナメル塗りの金属板が使われている。この金属板は、パリ市民にとってはありふれたイメージ、19世紀末以降、その当時から近代都市の住宅設備としてガスと水道がアパートに引かれていることを示す、フランスのエナメル製の標識を模造したものだ。本書はトリアノン・プレスのオーナー、アーノルド・フォークスに捧げられたもので、フォークスは1979年にロンドンで没するまでこれを所有していた。

マルセル・デュシャン（1887–1968）
《各階水道ガス完備（ロベール・ルベル著『マルセル・デュシャンについて』の函）》、1959年、コロタイプとステンシルで着色した飾り板、麻布、厚紙箱、エディション：グランド・デラックス・エディション、レターD、27点のエディション、I-XとA-Q、34.9×26.7×5.4cm

Marcel DUCHAMP (1887–1968)
Water and Gas on All Floors, Box for Robert Lebel's Sur Marcel Ducahmp, 1959, Linen-covered cardboard box with collotype-printed, and stencil-colored plaque, Publisher: Trianon, Paris, Edition: Grand Delux Edition, letter D, 27 exemplars, numbered I-X and lettered A-Q, 34.9×26.7×5.4cm

Marcel DUCHAMP

デュシャンは、最晩年の1966年にニューヨークのコルディエ・アンド・エクストロム画廊と提携して本書を出版した。これはデュシャンによる3つめにして最後となる、自身のメモと紙片の複製を箱の中に収めた作品である。紙片は個別のフォルダーにはさまれており、それぞれには1912年から1920年の日付が記されている。それぞれのフォルダーには「思索」、「辞典と地図」、「色彩」、「ガラス作品に関して」、「外観とアパリション」、「透視法」、「連続性」といった名称が付されている。箱の表紙には、デュシャン自身が1913年から1915年にかけて制作した《隣金属製の水車のある滑溝》の小さなレプリカが採用されている。このようなボックス形態の作品は、メモという情報の集積である一方で、美術作品として置く、オブジェとしての役割も果たしている。

マルセル・デュシャン (1887–1968)
《不定法にて(ホワイト・ボックス)》1966年、79枚のメモのコピー、メモを書き起こした冊子、プレキシグラスの箱にシルクスクリーン、出版社:コルディエ・アンド・エクストロム・ギャラリー、ニューヨーク、エディション:150、33.3×28.6×4.1cm

Marcel DUCHAMP (1887 – 1968)
In the Infinitive (The White Box), 1966, 79 facsimile notes, booklet of 79 notes, silkscreen, on vinyl mounted on plexiglass, Publisher: Cordier and Ekstorm Gallery, New York,
Edition: 150, 33.3×28.6×4.1cm

Joseph CORNELL

ジョゼフ・コーネル

ジョゼフ・コーネル（1903–1972）はアメリカの芸術家。アッサンブラージュの先駆者として知られる。1917年に父親を失い、ニューヨーク、クィーンズ北東部のユートピア・パークウェイと呼ばれる地区の一画にある木造の家で、生涯の大半を母親のヘレンと弟のロバートとともに過ごし、制作を続けた。1930年代、薬を取り出したピルボックスに様々な素材を入れこんだコラージュを制作。つづいて箱の作品をつくり始めた。それらは、ニューヨークの古書店や雑貨店で探し出した品々を、前面がガラス板で閉じられた手製の木箱に収めた作品であった。書物の切り抜きや絵画の複製写真、コーディアル・グラスやコルク球といった小物は、箱の中に配置されると、互いに詩的な連関を帯びて共鳴しあう。コーネルは生涯に800点以上の箱の作品を制作し、ユートピア・パークウェイのアトリエにはその箱を見に、マルセル・デュシャンやマックス・エルンスト、ペギー・グッゲンハイムらが訪れたという。《見棄てられた止まり木》は、鳥たちが飛び立った後の止まり木が主題となっている。箱の底辺には、残された繊細な羽が配されている。上部には家具調度の破片のような木片が所々に配されている中で、唯一、曲線的な形態のばねが空間に緊張感を与えるとともに、ユーモラスな雰囲気を醸し出している。

ジョゼフ・コーネル（1903–1972）
《無題（4つのピルボックス・オブジェクト）》1933年、ミクスト・メディア、各1.3×3.2cm、個人蔵

Joseph CORNELL (1903–1972)
Untitled (Four Pillbox Objects), 1933, Mixed media, 1.3×3.2cm, each, Private Collection

ジョゼフ・コーネル
《オブジェクト》1940年、ミクスト・メディア、1.6×4.4cm、個人蔵

Joseph CORNELL
Object, 1940, Mixed media, 1.6×4.4cm, Private Collection

ジョゼフ・コーネル
《オブジェクト：マリー・ブラシャス・アルビノのためのイアリング・セット》1939年、ミクスト・メディア、1.3×3cm、個人蔵

Joseph CORNELL
Object: Earlings Set for Marie Blanchas Albino, 1939, Mixed media, 1.3×3cm, Private Collection

Joseph CORNELL

ジョゼフ・コーネル (1903–1972)
《ロマンティック・バレエへのオマージュ(シルフィードとしてのアリシア・マルコヴァのために)》1947年、ミクスト・メディア、3.3×9.7×7cm、個人蔵

Joseph CORNELL (1903–1972)
Homage to the Romantic Ballete (For the sylphide Alicia Markova), 1947, Mixed media, 3.3×9.7×7cm,
Private Collection

ジョゼフ・コーネル
《無題（貯金箱）》1930 年代、コラージュ、25×18.8cm
個人蔵

Joseph CORNELL
Untitled (Tirelire), 1930s, Collage, 25×18.8cm
Private Collection

ジョゼフ・コーネル
《無題(聖母)》1930 年代、コラージュ、8.1×7.6cm
個人蔵

Joseph CORNELL
Untitled (La Vierge), 1930s, Collage, 8.1×7.6cm
Private Collection

ジョゼフ・コーネル
《 無題 》1930 年代、コラージュ、14.3×9cm
個人蔵

Joseph CORNELL
Untitled, 1930s, Collage, 14.3×9cm
Private Collection

Joseph CORNELL

ジョゼフ・コーネル (1903–1972)
《見棄てられた止まり木》1949年、ミクスト・メディア、
41.5×33×10.2cm、寄託作品

Joseph CORNELL (1903–1972)
Deserted Perch, 1949, Mixed media,
41.5×33×10.2cm, Deposited Work

ジョゼフ・コーネル
《無題（鳩小屋）》1950年代初頭、ミクスト・メディア、
36×26×6.7cm、個人蔵

Joseph CORNELL
Untitled (Dovecote), Early 1950s, Mixed media,
36×26×6.7cm, Private Collection

ジョゼフ・コーネル
《無題（旅人の宿：アポリナリス）》1951年、
ミクスト・メディア、49×32×10.5cm、個人蔵

Joseph CORNELL
Untitled (Hotel des voyageurs: Apollinaris), 1951,
Mixed media, 49×32×10.5cm, Private Collection

Joseph CORNELL

コーネルは、箱の作品を多く制作する一方で、独自の魅力を放つ多彩なコラージュ作品を手がけている。平面コラージュの手法は、それが立体的に繰り広げられるアッサンブラージュの箱にもつらなるコーネル作品の原点である。1956年頃に制作された《衛星の観測 I》にはベラスケスの《ラス・メニーナス》（プラド美術館蔵）の王女、ハチドリ、幾何学形態などの絵柄がコラージュされている。1960年代はじめの《無題（今から5万年後）》は北斗七星がそれぞれの星の動きにより、5万年後にどのような形になるかを示す予想図を貼り込んだコラージュである。1964年から66年頃に制作された《ペニー・アーケイド（ランナー・ワルツ）》は、惑星や人形、星座のイメージをもってウインナ・ワルツの生みの親と言われる19世紀の作曲家ヨーゼフ・ランナー（1801–1843）を主題としている。

ジョゼフ・コーネル（1903–1972）
《衛星の観測 I》1956年頃、コラージュ、29.2×21.6cm

Joseph CORNELL (1903–1972)
Observation of a Satellite I,
c.1956, Collage, 29.2×21.6cm

ジョゼフ・コーネル
《無題（今から5万年後）》1960年代初頭、コラージュ、29.5×22.2cm

Joseph CORNELL
Untitled (50,000 Years from Today),
Early 1960s, Collage, 29.5×22.2cm

ジョゼフ・コーネル
《ペニー・アーケイド（ランナー・ワルツ）》1964–66年頃、コラージュ、30.4×22.8cm

Joseph CORNELL
Penny Arcade (Lanner Waltzes),
c.1964–66, Collage, 30.4×22.8cm

ジョゼフ・コーネル
《無題（ラベイユ）》1965–66年頃、コラージュ、25×19.8cm、個人蔵

Joseph CORNELL
Untitled (L'abeille),
c.1965–66, Collage, 25×19.8cm, Private Collection

TAKIGUCHI Shuzo

瀧口修造（1903–1979）は、富山県出身の詩人・美術批評家・造形作家。慶應義塾大学在学中の1920年代後半にシュルレアリスムに衝撃を受けて以来、その紹介と普及に大きな役割を果たした。戦後には日本の前衛芸術の美術評論を行い、かつそのかたわらで作品制作を行った。評論家としては美術のみならず、デザイン、音楽、映画、写真と多岐にわたる作家・作品を対象として発言を続け、芸術の革新を担う若い世代に大きな影響を与えた。ジョアン・ミロやマルセル・デュシャンと親しく付き合った。瀧口を敬慕し、その周辺に集った国内外の美術家の数は計り知れず、《漂流物 標本函》は視覚的にその事実を提示してくれる機能も備えている。これは、エディシオンエパーブから刊行された限定30部のうちのひとつである。中央が瀧口の作品。左上隅より時計回りに中西夏之、武満 徹、岡崎和郎、荒川修作とマドリン・ギンズ、多田美波、赤瀬川原平、加納光於、野中ユリの作品が収められている。

瀧口修造ほか
《漂流物 標本函》1974 年、
ミクスト・メディア、
33×33×5.8cm、個人蔵

TAKIGUCHI Shuzo, et. al.
Drifting Things / Specimen Box, 1974, Mixed media,
33×33×5.8cm,
Private Collection

マルセル・デュシャン《大ガラス》の「眼科医の証人The Oculist Witnesses」の部分を立体化した、マルティプルの作品。《グリーン・ボックス》に収められた紙片に、デュシャンは、この部分を「Tableaux d'oculiste」あるいは「Tableaux oculistes」と説明している。これが作品タイトルの根拠となっている。瀧口修造は当初エディションをたった4部限定とする意向であったというが、岡崎和郎の勧めに従って100点に変更されたという。ただし実際に製作されたのは 60 点のみである。作品自体の制作は、瀧口のアイデアに基づき岡崎が制作に当たっている。作品を分解して収める箱にも瀧口の美意識が存分に反映されている。

瀧口修造（1903–1979）
岡崎和郎（1930–2022）
《検眼圖》1977 年、
シルクスクリーン・アクリル板、レンズ、アルミニウム、
高さ 26cm

TAKIGUCHI Shuzo
(1903–1979)
OKAZAKI Kazuo
(1930–2022)
Oculist Witnesses after Marcel Duchamp,1977,
Silkscreen on acrylic board, lens and aluminum, H. 26cm

OKAZAKI Kazuo

岡崎和郎（1930–2022）は岡山県岡山市出身の芸術家。1950年代より本格的に作家活動を開始し、1958年に読売アンデパンダン展に出品。1966年には最初の個展を東京画廊にて開催している。1960年代より、「御物補遺」という言葉を制作の指針として掲げ、西洋では見落とされてきた物の見方を、東洋の見地から補足するようなオブジェを制作することを掲げ、身の回りにあるありきたりのものを素材にした作品をつくりはじめた。岡崎の作品は、レディーメードのオブジェの創始者であるデュシャンに触発されたものも多い。岡崎は、今世紀に至るまでこの思考を中心に据えた数多くの独自の作品を発表し続けていたが、2022年7月に急逝した。

岡崎和郎（1930–2022）
《御物補遺》2000年、
ミクスト・メディア、
箱：8×27×22cm

OKAZAKI Kazuo
(1930–2022)
Object Supplement, 2000,
Mixed media,
Box: 8×27×22cm,
Private Collection

岡崎和郎
《HISASHI》1998/2022年、
ブロンズに焼付、
3×57×10cm、個人蔵

OKAZAKI Kazuo
HISASHI, 1998/2022,
Bronze, baking finish,
3×57×10cm,
Private Collection

岡崎和郎
《ギブアウェイパック2》
1968/1977年、
ミクスト・メディア、
53.5×25.1×6.4cm、
個人蔵

OKAZAKI Kazuo
Giveaway Pack 2,
1968/1977, Mixed media,
53.5×25.1×6.4cm,
Private Collection

岡崎和郎
《三つの心器》2019年、
ミクスト・メディア、
33.2×17.3×12.2cm /
8.5×16×12.4cm /
8.5×16×12.4cm、
箱：27.5×44.3×21.3cm
個人蔵

OKAZAKI Kazuo
Three Treasures, 2019,
Mixed media,
33.2×17.3×12.2cm /
8.5×16×12.4cm /
8.5×16×12.4cm,
Box: 27.5×44.3×21.3cm
Private Collection

YAMAGUCHI Katsuhiro

山口勝弘（1928–2018）は東京生まれの造形作家。新しいテクノロジーを取り入れた前衛的な表現で、日本におけるメディアアートの先駆者として知られる。日本大学法学部在学中の1948（昭和23）年に最初の抽象絵画を発表。独学で美術の道に進んだ山口は、アメリカに亡命したバウハウスの作家ラースロー・モホリ＝ナギの造形理論を研究、また岡本太郎や瀧口修造など戦前戦後をつなぐ日本の前衛の先達からも大きな影響を受けている。1951年9月、山口は実験工房の結成に参加。この時、光学的原理に基づくオリジナルな構造を持った造形作品を手がけた。それらの作品は、前面にはめたモールガラスによる屈折で、見る者の視点によってイメージが変化して見えるという構造になっている。旧来の絵画や彫刻の枠を外れたこの独創に、フランス語でショー・ウィンドウを意味する「ヴィトリーヌ」の名前を与えたのは瀧口修造であった。「ヴィトリーヌ」は大小80点余りがつくられ、様々なヴァリエーションがある。《ヴィトリーヌ 昇天》においては、内部に幾何学的なドローイングと上辺に木片が据えられており、視線を上下左右に動かすことにより波状のデザインガラスから見える形状は変化を続ける。

山口勝弘 (1928–2018)
《ヴィトリーヌ》1950年代、油彩・ガラス、板、
21×18×7.5cm、寄託作品

YAMAGUCHI Katsuhiro (1928–2018)
Vitrine, 1950s, Oil on glass and panel,
21×18×7.5cm, Deposited Work

山口勝弘
《ヴィトリーヌ　昇天》1955年、型板ガラス、絵具、木、
64.3×55.5×10cm

YAMAGUCHI Katsuhiro
Vitrine Ascension, 1955, Glass, paint and wood,
64.3×55.5×10cm

MATSUZAWA Yutaka

松澤 宥（1922–2006）は、長野県諏訪郡下諏訪町生まれで、同地を拠点に国内外で活動を続けた、コンセプチュアル・アーティスト。1960年の「第12回読売アンデパンダン展」（東京都美術館）および「超現実絵画の展開展」（東京国立近代美術館）に《プサイの意味 ―ハイゼンベルグ宇宙方程式によせて》を出展。以降「プサイ」を冠する作品の発表を続けた。1960年代前半に松澤は函型の作品を制作し、「読売アンデパンダン展」に「プサイの函」と題する作品を出品している。これは、1969年には、東京の青木画廊で「松澤 宥展」（6月16日–30日）に出品された作品で、目録には「プサイ函」と記されている。マルチプルで30部作成される予定であったといい、これはそのエディション1にあたる。実際につくられた数は30部を下回る、という。この作品において「函」は、書籍の中身がくり抜かれたものが使われており、その中に松澤の思考を示す様々な紙片が収められている。

松澤 宥（1922–2006）
《プサイの函》1969年、
ミクスト・メディア、
函：21.6×16×3.4cm、
笹沼俊樹氏蔵

MATSUZAWA Yutaka
(1922–2006)
Psi Box, 1969,
Mixed media,
Box: 21.6×16×3.4cm,
Collection of
SASANUMA Toshiki

FLUXUS

フルクサスは1960年代前半に美術家ジョージ・マチューナス(1931–1978)が主導した芸術運動。1963年のマチューナスによるマニフェストでは、伝統的な芸術に対抗する前衛的性質を掲げながら、フルクサスの語源がラテン語で「流れる、変化する」といった意味を持つとおり、厳密に定義されているわけではない。美術家に限らず、詩人、作家、音楽家など様々な領域の芸術家が関わる広範な芸術運動となった。1963 年以降に新聞の発行にあわせてマルティプルの「フルックス・キット」の制作が行われた。これはデュシャンの《トランクの箱》を想わせるトランクで、様々な作品がしきりの中にぴったりと収められている。フルクサスの「携帯できる美術館」となっている。1965年以降は、エディション化されたが、随時新しい作品を取り入れていたために、内容は各トランクによって異なる。

『フルクサス 30 周年記念 サウンド・アンソロジー 1962–1992年』(豪華版)、スロースカン・エディションズ、デン・ボッシュ(オランダ)、1993年刊、ミクスト・メディア、箱 : 38×44cm

Fluxus: 30th Anniversary, Sound Anthology: Delux: 1962-1992 (Delux Edition), Marcel Alocco, Eric Andersen, Giuseppe Chiari, …(et. al.), Slowscan Editions, Den Bosch, Holland, 1993, Mixed media, Box: 38×44cm

ジョージ・マチューナス(編)《Fluxkit》1964 年、ミクスト・メディア、36.5×43.7×12.6cm、うらわ美術館蔵

George MACIUNAS (ed.) *Fluxkit*, 1964, Mixed media, 36.5×43.7×12.6cm, Urawa Art Museum

SHIOMI Mieko

塩見允枝子 (1938年生まれ) は、岡山県岡山市生まれの現代音楽作曲家、造形作家。1963 年にナム・ジュン・パイクによってフルクサスに紹介され、翌年マチューナスの招きでニューヨークへ渡り、フルクサスに参加した。1970年以降は大阪を拠点に活動するが、1990 年にヴェネツィアで開催されたフルクサス・フェスティヴァルに招待されたことから欧米の作家達との交流が復活し、活動を共にしている。その創作活動は、音楽作品やパフォーマンスの他に、詩、オブジェクト・ポエムなど多岐にわたる。「音楽の小瓶」は、1993年ケルンのフンデルトマルク画廊が主催した「サウンド・オブジェクト展」のために制作したシリーズ作品で、様々な音楽的コンセプトが小瓶の中に詰められ、それが本作ではスーツケースの中に収められている。

塩見允枝子 (1938年生まれ)《音楽の小瓶 #1～#14》1993年、ミクスト・メディア、瓶高 : 8～9.5cm、アタッシュケース : 12×42.5×34cm、エディション : 2、有限会社ワタヌキ／ときの忘れもの

SHIOMI Mieko (Born in 1938) *Bottled Music #1～#14*, 1993, Mixed media, Bottle height: 8～9.5 cm, Attaché case: 12×42.5×34cm, Edition: 2, Watanuki Ltd./TOKI-NO-WASUREMONO

ISHIBASHI FOUNDATION

石橋財団コレクション選
特集コーナー展示
Art in Box — マルセル・デュシャンの《トランクの箱》とその後
2022年10月25日(火)—2023年2月5日(日)
アーティゾン美術館

企画・執筆 : 新畑泰秀
デザイン : 田畑多嘉司、秋本真奈帆
翻訳 : ルシー・S. マクレリー
印刷 : 株式会社 野毛印刷社
発行・著作 : 公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館
〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

Selections from the Ishibashi Foundation Collection
Special Section
Art in Box: The *Box in a Valise* by Marcel Duchamp and Its Aftermath
25 October [Tue], 2022 — 5 February [Sun], 2023
Artizon Museum, Ishibashi Foundation

Curation and Texts: SHIMBATA Yasuhide
Design: TABATA Takashi, AKIMOTO Manaho
Translation into English: Ruth S. McCreery
Printed by: Noge Printing Corp.
Published by: Artizon Museum, Ishibashi Foundation ©2022
1-7-2, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

謝辞
本展覧会および図録の作成のために、下記の方々や個人および関係機関から
多大なるご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。(敬称略)
横田茂ギャラリー、笹沼俊樹、東京国立近代美術館、うらわ美術館、
有限会社ワタヌキ／ときの忘れもの、雅陶堂ギャラリー株式会社、福森大二郎

Acknowledgement
We would like to express our heartful thanks to the following individuals and organizations.
Shigeru Yokota Gallery, Sasanuma Toshiki,
The National Museum of Modern Art, Tokyo, Urawa Art Museum,
Watanuki Ltd./TOKI-NO-WASUREMONO, Gatodo Gallery, Fukumori Daijiro

ジョゼフ・コーネル《無題 (4つのピルボックス・オブジェクト)》撮影: 松村 桂
岡崎和郎《御物補遺》撮影: 佐藤克秋
Joseph CORNELL, *Untitled (Four Pillbox Objects)* Photo: MATSUMURA Kei
OKAZAKI Kazuo, *Object Supplement* Photo: SATO Katsuaki

図版クレジット / Credit
Marcel DUCHAMP P.1,4–11 © Association Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 C4015
Joseph CORNELL P.12–19 © The Joseph and Robert Cornell Memorial Foundation/VAGA at ARS, NY/JASPAR, Tokyo 2022 C4015
OKAZAKI Kazuo P.22–23 ©The Estate of Kazuo Okazaki、横田 茂ギャラリー
YAMAGUCHI Katsuhiro P.24 ©The Estate of Katsuhiro Yamaguchi、横田 茂ギャラリー
MATSUZAWA Yutaka P.25 ©Yutaka Matsuzawa
George MACIUNAS P.26 © 2022 George Maciunas / ARS, New York / JASPAR, Tokyo C4015
Jan van Toorn P.27 © Pictoright, Amsterdam & JASPAR, Tokyo, 2022 C4015
SHIOMI Mieko P.27 ©Mieko Shiomi、有限会社ワタヌキ／ときの忘れもの

公益財団法人石橋財団
アーティゾン美術館

Marcel DUCHAMP, *From or by Marcel Duchamp or Rrose Sélavy (Box in a Valise), Series B* (detail), 1952, 1946 (pencil drawing)